

柁牟礼城跡

—角木中世集落跡—

2004

大分県教育委員会

耨牟礼城跡

—角木地区—

序 文

本書は、県教育委員会が大分県佐伯土木事務所の依頼を受けて実施した、県道佐伯津久見線道路改良工事に伴う^{とがむれじょうあと} 榎牟礼城跡の発掘調査報告書です。

佐伯市周辺には弥生時代の^{しらかたいせき} 白濁遺跡・^{しもじょういせき} 下城遺跡をはじめ、中世では佐伯市上岡の十三重塔・弥生町小倉の磨崖石塔、近世では^{つるやじょうあと} 鶴屋城跡など、多くの文化財が所在しています。

今回調査した榎牟礼城跡は、佐伯市と弥生町にまたがる榎牟礼山の東山麓に位置しています。調査は狭い範囲でしたが、その結果、室町時代から安土桃山時代の建物跡や、^{びぜんやき} 備前焼、^{はじしつどき} 土師質土器、^{てんもくじゃわん} 天目茶碗、^{こせん} 古銭などの遺物が発見され、この地域の中世城館に関する新たな知見を得ることができました。

本書が埋蔵文化財の保護に向けて、また地域の先人の生活を理解する資料として、さらには学術研究の一助として活用されれば幸いです。

終わりに、発掘調査に御支援、御協力をいただきました関係各位に、深く感謝申し上げます。

平成16年 3月31日

大分県教育委員会教育長

深 田 秀 生

例 言

1. 本書は県道佐伯津久見線道路改良工事にかかる発掘調査を実施した、佐伯市大字上岡字角木所在の梅牟礼城跡の報告書である。
2. 発掘調査は、大分県土木建築部佐伯土木事務所の依頼を受けて実施した。
3. 出土遺物の整理は大分県教育委員会文化課文化財資料室で整理した。
4. 本書に掲載した挿図は綿貫俊一、生野令子、山本哲也が作成した。
5. 掲載した写真は遺構・遺物を綿貫俊一が撮影したものを使用した。空中写真は九州航空株式会社が2003年9月22日に撮影したものを使用。
6. 本書に使用した方位は国土座標系である。また、遺構番号に付けた記号は、SD-溝、SK-土坑、P-小型土坑・柱穴である。
7. 本書の編集は綿貫俊一、山本哲也が行った。なお第3章3と第4章1を山本が作成した他は綿貫が作成した。

本文目次

第1章 はじめに	1
第2章 遺跡の立地と環境	2
第3章 調査の記録	6
第4章 まとめ	23

挿図目次

巻頭図版1

遺跡分布図

遺跡と周辺の地形

第1図 梅牟礼城跡角木地区の位置と周辺の遺跡	3
第2図 角木地区と周辺の遺跡の地形	5
第3図 角木地区の遺構分布図	7
第4図 SB1の平面図	9
第5図 SB2の平面図	10
第6図 SB3の平面図	11
第7図 ピット実測図	13
第8図 土坑・溝遺構実測図	15
第9図 出土遺物実測図	16
第10図 出土遺物実測図	17
第11図 出土遺物実測図	18
第12図 出土遺物実測図	19
第13図 出土遺物実測図	20

写真図版



1 角木地区遺跡の遠景写真—南から— 中央やや上の集落と山の境界付近



2 角木地区遺跡垂直写真—上が西— 写真中央



1 角木地区遺跡の近景写真—上が西—



2 角木地区遺跡垂直写真—上が西—

第1章 はじめに

1.調査に至る経緯

大分県佐伯市は、大分県の南東の海岸部に位置し、周囲を反時計廻りに上浦町、津久見市、弥生町、直川村、延岡市、米水津村、鶴見町に囲まれている。この佐伯市は大分県東南部に位置し、豊後水道に面するリアス式海岸の湾奥に広が県南部の中心都市である。この佐伯市には中世、佐伯一帯を領していた佐伯氏により築かれたとされる梅牟礼城が存在する。中世城郭として、その景観の壮麗さをはじめ周辺城下町を含めた学術的価値は計り知れないものがある。またその一方で、高速道路建設などで周辺地域の開発も進められつつある。とりわけ佐伯氏の拠点があった梅牟礼城跡東麓の大字上岡での開発が著しい。

上岡地区を通過する県道佐伯津久見線は大分県津久見市の中心部と大分県佐伯市の中心部を結ぶ幹線道である。佐伯市の上岡周辺は東九州自動車道の建設工事や付随する工事が進められており、県道佐伯津久見線道路改良工事もこれに関わる工事である。従来よりこの地域は梅牟礼城の山麓で、居館の推定地が存在していたこともあり、多くの遺跡の存在が予測されていた。実際、1988年～1990年の梅牟礼城跡関連の調査では、山麓部から建物跡や、土師質土器が多数見つかっている。平成14年には具体的な工事計画がまとまり、大分県教育委員会は平成15年6月に工事予定区間の試掘調査を行った。その結果、佐伯市大字上岡字角木2336.2338番地の1500㎡程の地所で鎌倉時代、室町時代、江戸時代の遺物と遺構が密集する部分があった。

上記の試掘結果に基づき、大分県教育委員会では大分県土木建築部企画検査室・大分県佐伯土木事務所と遺跡の取扱いについて協議した結果、現状保存が不可能となったため、平成15年度中の発掘調査を実施することになった。発掘調査は2003年8月18日から9月24日までの間である。

2.発掘調査の組織

調査主体	大分県教育委員会 教育長 深田秀生
調査組織	今永 一成 (県文化課長) 麻生 祐治 (参事兼課長補佐) 清水 宗昭 (参事兼課長補佐) 高橋 信武 (主幹) 綿貫 俊一 (副主幹：調査員) 生野 令子 (囑託：調査員)
発掘作業員	那木 貞文 木許 直樹 高司喜久美 後藤きよみ 上田 美穂 上田きみ代 工藤 守 黒木 正吉 黒木美代子 榎 武美 仲谷 敏

第2章 遺跡の立地と環境

1. 周辺の地理的環境

梅牟礼城跡 - 角木地区 - の位置する佐伯市周辺は東北方向から南西方向に中央構造線を形成する山嶺が何重にも並行しながら存在する地方である。こうした山嶺を縫うように幾多の川が豊後水道方面に流れている。とりわけ水量の多い番匠川は、県南地域第1の川であり、川沿いに広い沖積地を形成している。この番匠川の北側にあるのが中央構造線の一支部である梅牟礼城山であり、東に直面する山上寺の山も同じ一支部である。この梅牟礼城山と山上寺山に挟まれた谷は北方に向かうほど細く狭まる。この谷の中央を門前川が南流し、番匠川に合流するが、梅牟礼城跡 - 角木地区は門前川の右岸側で、梅牟礼城山の東麓の裾部にあたる。

遺跡は梅牟礼城山の東麓の裾部を削り出した平地に立地する。平地は沖積地との比高差が約6mある。遺跡の北側は梅牟礼城山からの沢谷地形となっており、遺跡の北を画する。遺跡が立地する平地は南側約30mで細くなり収束する。

大分県佐伯市大字上岡字角木2336.2338番地に位置する。行政的には門前地区に属する。

2. 周辺の歴史的環境

佐伯市・弥生町の遺跡分布をみると、縄文時代には角木地区北方に位置する門前遺跡で縄文時代早期の無紋土器や多くの集石遺構が見ついている。遺物出土層の上にはアカホヤ火山灰が堆積しており、九州の縄文時代早期の標識資料として重要となってくるであろう。この他、白濁遺跡で少量の縄文時代後期の土器が出ているのみであり、本格的な縄文時代遺跡の発掘調査は今後に委ねられる状況である。

弥生時代になると、当地方の調査で、まず注目されるのは佐伯市下城貝塚・長良貝塚・白濁遺跡であろう。これらの遺跡は沖積平野に隣接する台地・微高地上に位置しているが、下城遺跡では弥生時代前期～中期の集落跡が調査され、東九州の弥生時代前期・中期を代表する土器型式である「下城式土器」として知られた標識遺跡として名高い。下城遺跡では弥生時代前・中期に帰属するとされる貝塚をはじめ掘立柱建物跡4棟、および製鉄跡と見られる堅穴が1基確認されている。近年この製鉄跡と見られる堅穴があった場所から採取した鉄滓を分析したところ、中世頃の特徴をもつことが判ったようである¹。また、長良貝塚においても弥生時代とされる貝層中から鉄滓・鉄鎌が出土している。これらの製鉄遺構の・遺物は近年全国各地において飛躍的に増加した資料から判断すれば、下城貝塚出土のフィゴ羽口・釘・鉄片などの出土は鍛冶工房の様相を呈し、製鉄遺構が掘立柱建物跡の帰属時期もあわせて後世の所産である可能性が高く、当遺跡は弥生時代以降の複合遺跡であると考えられる。しかも、その広がりや長良貝塚などからも出土していることから、佐伯地域の比較的広範囲に製鉄遺跡の広がりが想定できよう。白濁遺跡にしても弥生時代の貝塚・堅穴住居跡をはじめ掘立柱建物跡や臓骨器が出土しており、弥生時代以降の複合遺跡であることがわかる。ただし、白濁遺跡は限られた地形の広場に数軒の住居跡が見つかり、出造り小屋的で季節的な極めて短期間において単位集団で漁労を生業とした集落考えられる。

註1 鉄滓を採取し、分析を大沢正己氏に依頼した現南串来町教育委員会の遠部慎氏のご教示。

古墳時代には島嶼部・河口部に古墳が造営され、海を舞台にした人々の足跡が確認できる。現在、沖積作用や埋め立てなどにより当時とは異なる地理的状況を示すが、当時から見ると東島古墳石棺・宝剣山古墳・萩山古墳群は海に浮かぶ島嶼部に、また岡の谷古墳・岩清水古墳は湾口部を見下ろす丘陵部に、檜野古墳は番匠川を見下ろす丘陵部に造営されている。宝剣山古墳では凝灰岩を石材とする箱式石棺から三角板鋌留短甲をはじめ、鉄剣・鉄鏃・鉄刀など当地域の古墳において最も注目される遺物の出土が見られる。この他には弥生町上小倉横穴墓群において36基を超える古墳時代後期の横穴が確認されている。佐伯市・弥生町には古墳・横穴墓はこのほかには確認されておらず、大分県下においてもその密度が極めて希薄な地域といえる。この傾向は臼杵市より南側の海岸部やその内陸部の特性であり、墳墓の密度とその立地を含めて今後の検討課題になる様相をもつ。また集落址としては佐伯市汐月遺跡において古墳時代後期の集落遺跡が確認できるだけで、古墳時代を含め、それ以降の集落址の所在は今後の発掘調査にかかっている。

奈良時代以降においても当地域の埋蔵文化財集落址・墓地を把握するには、未だ調査の手が充分とは言えず、文献や石造物など地表に表象される遺物から中世期には繁栄の足跡が窺える。とりわけ平安時代から鎌倉時代にかけての臓骨器の出土数は県下の総数を凌駕しており、旧豊前国地域とともに出土量の集中する地域である。佐伯市白濁遺跡では4例の臓骨器が出土しており、これらは奈良時代末～平安時代中期に位置付けられるものである。また、佐伯市大字上岡字八戸所在の十三重の塔(通称くじん塔)の塔直下から素紋鏡を蓋とした陶製四耳壺をはじめ、周辺部を含めて総計11例の臓骨器が発見されており、これらは平安時代末～鎌倉時代に属するものとされている。また、上小倉には磨崖石塔が約40基見つかっており、嘉暦元年(1326)から康永4年(1345)に至る記年銘が刻まれており、南北朝～室町時代の石塔群であることが判る。これらの磨崖石塔群のうち嘉暦元年(1326)銘の宝塔にはその造立者として「大神惟武」という名前がみられ、また康永4年(1345)銘の宝塔にも「惟覚」という名前がみられる。大神惟武は大神姓佐伯一族にその名前があり、惟覚も「惟」字を通字としているてんと、当時の地域的な勢力圏を考えたときに佐伯氏以外には考えられない。つまり、弥生町と佐伯氏の境にあり、このたび報告する梅牟礼城跡-角木地区-の西に聳える梅牟礼山には佐伯氏の梅牟礼城や木戸城、小田山砦がある。更に角木地区の南方には佐伯氏の居館址と目される八戸があるし、佐伯氏が勧請した神社もこの谷あいが多い。梅牟礼城の谷を挟んだ東対面の山上には一上寺・二上寺・三(山)上寺と呼ばれる寺院址があり、とりわけ山上寺は野史『梅牟礼実録』に佐伯氏10代佐伯薩摩守惟治との関わりで登場する。山上寺からは古銭と古鏡がでており、中世に溯る寺院であることはたしかである。山城としては佐伯市・弥生町周辺には梅牟礼城や木戸城、小田山砦の他、宇山城・高城・八幡山城・中山砦・河破ヶ城・河内城(以上佐伯市)、小田山砦・平城・竹田城(以上弥生町)など中世期の山城が分布している。とりわけ梅牟礼城は大規模な領域と縦堀、堀切をもっており、豊後国南部における有力な地頭であった佐伯氏の実力を偲ばせている。

梅牟礼城やその山麓部分における考古学的な調査は1988年から1993年にかけて調査が行われている。この調査によって梅牟礼城の詳しい縄張り図が完成し、城跡の規模とがわかった。また山麓部の調査も行われ、住居の柱痕や陶磁器・土師器類が見つかり、佐伯氏の居館と家臣団の根小屋集落が東麓にあった可能性が極めてつよいことが判った。しかも根小屋集落の造成方法としては、山裾や尾根端部を削り、残土を前方に埋めていく方法で、場所によって段状になっているところもあった。

第3章 調査の記録

1. 調査の概要

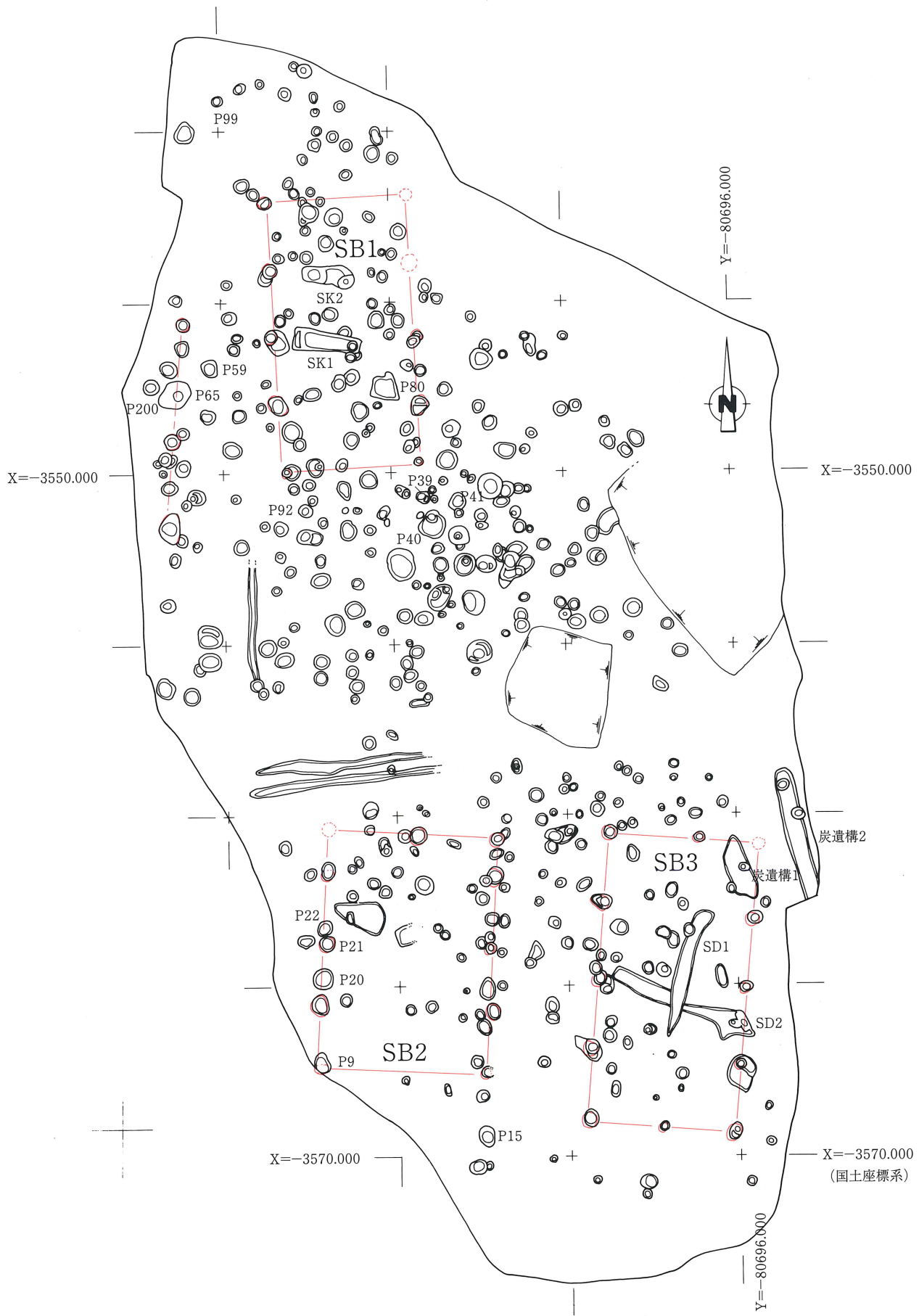
角木地区は梅牟礼山の東側山裾部とこれに並行する水田地域・荒地・住居地が存在する場所である。道路予定地における遺構の分布を知る為にはまず試掘調査を行った。試掘予定地の最も北側の水田地及び住居跡地においては表土直下に山側からの山礫が厚く堆積していた。また最も南側の荒地は重機で最大4～5m掘削したが、すべて埋土であった。この地点については旧地形図では古い水田地帯で、1970年代前後に城西団地造成に伴うかさ上げが行われており、試掘地の埋土もこれにかかるものである。最も北側で試掘した水田地の南に、5mほど高い山裾を削りだした平場があり、畑地として利用されていた。この平場に試掘トレンチを10条設け、約0.50m下げた段階で中世・近世の陶磁器が少量と、柱穴・土坑・溝などの遺構が密集した状況で検出された。この結果を受けて本格的な発掘調査が実施されることになった。

発掘調査を行った遺跡地は山裾部を削りだした平地上にある。東側前方の低い部分には民間地の住宅が目前に位置する。この為、調査時の天候の急変により、廃土と調査区の東よりの部分が崩壊し、土石流となることが想定されたので、東側石垣部分から2m程度内側までを発掘調査区とした。表土の除去はバックフォードで遺構検出面である地山や整地層上面までの約40cmを取り除いた。表土の除去後、国土座標系の基準点の設置をした。更にこの基準点を基準とした5mの区画杭を設置し、区画は北からA、B、C、D…、東から1、2、3…とし、両者交差する区画の名称とした。また柱穴等の小遺構で遺物が出た場合は、P1、P2…と番号を付けた。

遺構検出は作業員による人力で行い精査に努めた。発掘調査で検出した遺構は、掘立て柱建物3～4棟、溝が3条、土坑2基、その他柱穴多数であった。柱穴の大半は建物跡として復元できなかったが、柱痕や柱自体の残片でている例も若干あった。溝(SD)は浅く、焼土・炭片が密集した例のほか、幅や深さがほとんどない例もあった。柱穴の数が最も多く、発掘区のほぼ前面に分布しているが、発掘区の中央部で東西方向に幅8～9m。

土坑は長方形の例と円形の例があった。長方形の例は幅の割に深く、墓の可能性もあったが、寛永通宝と若干の遺物のみで明確ではなかった。周辺の柱穴によりやや土坑の平面形と内部の堆積物に変形を受けていた。円形の例は掘り方の断面形が筒形の形状を示していた。

発掘区の中央部から東側の多くは整地層があり、遺構の検出に際し見分けるのが困難であった。とりわけ遺構の底面がどこまでなのか、区分が非常に困難で、掘りすぎの場合もしばしばであった。この整地層の下面には自然の勾配上に堆積したアカホヤ火山灰層があり、埋め立てて整地したことがはっきりしていた。一方、発掘区中央から山際にかけては山を形成している地山層があり、旧耕作土除去後すぐに遺構検出面として現れることから考えて、平地を造る際に削り出した面であることが容易にわかる。なお発掘調査の結果からすると、この地点が削りだされ以降、水田として利用された際に形成される酸化鉄の沈着した床土などは観察されなかった。したがって住居などが廃絶して以降は畑地として専ら利用されたのである。



第3図 角木地区の遺構分布図 ※5m方眼

2. 遺構

SB1

規模と概要 SB1の建物跡は発掘区の北半部に位置する(第3図)。平場北側の崖際から3~4m南に入った部分で、平場東側の崖際から14m西に入った部分である。SB1の主軸(長軸)は南北方向で、西側の山斜面側を裏とし、東側の低地方向を正面側とする建物である。柱穴の並びから南北方向に4間、東西方向に2間という構造である(第4図)。規模は、南北が800cm、東西が400cmである。遺物はSB1を構成するP56・P58・P62・P61・P64・P70・P81から見つかっている。やはり山側より低地側が侵食や遺構検出面の削平により東側の南北列柱穴が浅くなっている。建物範囲には多くの土坑・柱穴があるが関係は不明である。SP81から15世紀後半~16世紀前半代の龍泉窯系青磁碗破片が出ている。

SB2

規模と概要 SB2の建物跡は発掘区の南半部に位置し、SB3の西に並列する位置関係である(第3図)。平場北側の崖際から約23m南に入った部分で、平場東側の崖際から14m西に入った部分である。SB2の主軸(長軸)は南北方向で、西側の山斜面側を裏とし、東側の低地方向を正面側とする建物である。柱穴の並びから南北方向に4間、東西方向に2間という構造である(第5図)。規模は、南北が900cm、東西が500cmである。遺物はSB2を構成するP9・P21・P48から見つかっている。やはり山側より低地側が侵食や遺構検出面の削平により、北東隅部の柱穴を除いて東側の南北列柱穴が浅くなっている。建物範囲には多くの土坑・柱穴があるが関係は不明である。なお西側の南北列の柱穴のうち次の柱穴で柱の木質部分が残存している。内訳は、SP9が2本、P21が1本、P48が2本で、詳細は後述したい。

SB3

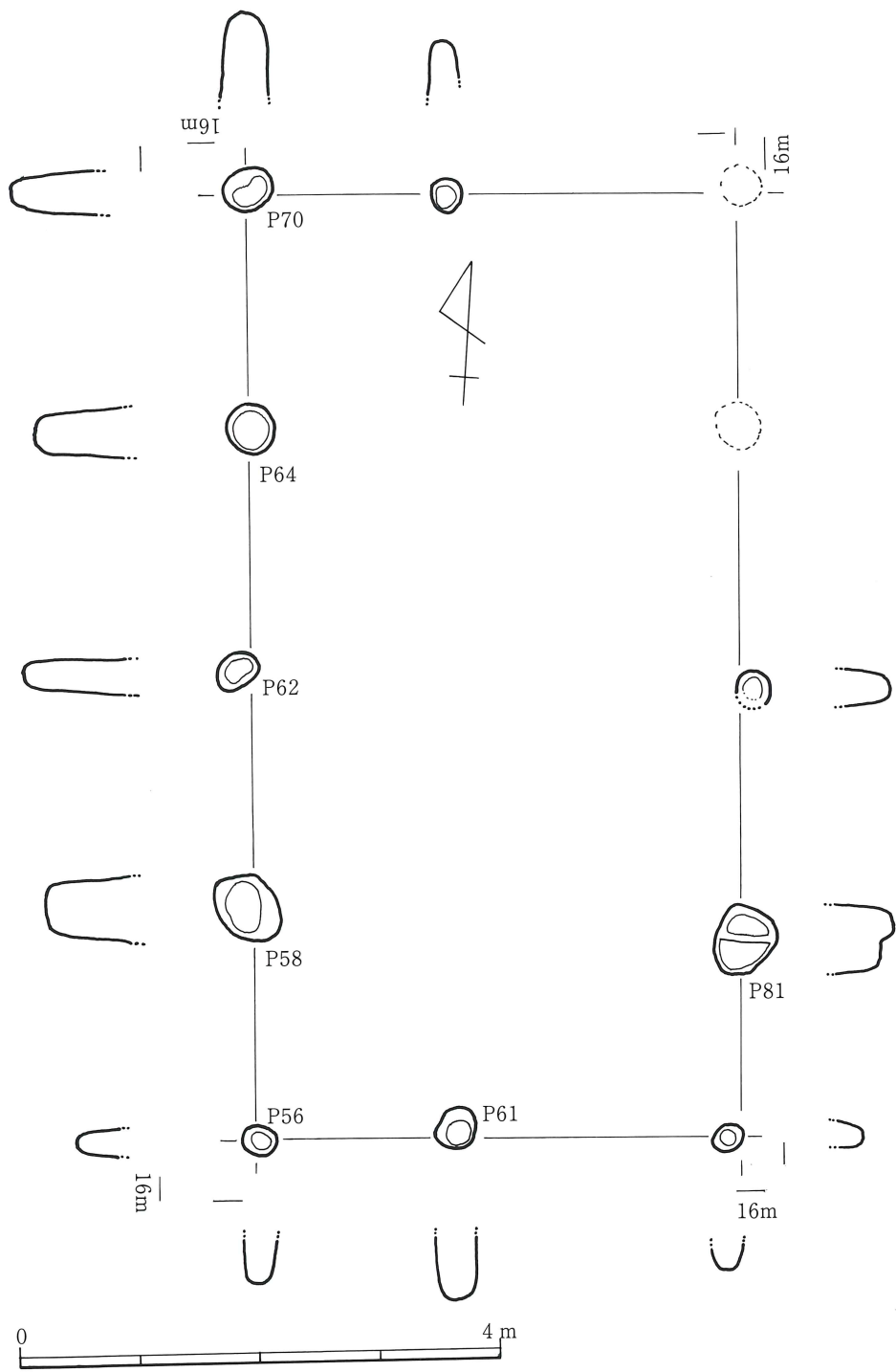
規模と概要 SB3の建物跡は発掘区の南半部に位置し、SB2の東に並列する位置関係である(第3図)。平場北側の崖際から約23m南に入った部分で、平場東側の崖際から4m西に入った部分である。SB3の主軸(長軸)は南北方向で、西側の山斜面側を裏とし、東側の低地方向を正面側とする建物である。柱穴の並びから南北方向に4間、東西方向に2間という構造である(第6図)。規模は、南北が840cm、東西が440cmである。遺物はSB3を構成するP3・P31・P100から見つかっている。やはり山側より低地側が侵食や遺構検出面の削平により、東側の南北列柱穴が浅くなっている。建物範囲には多くの土坑・柱穴があるが関係は不明である。なお西側の南北列の柱穴のうちP3柱穴で柱の木質部分が残存しているが、詳細は後述したい。

P3

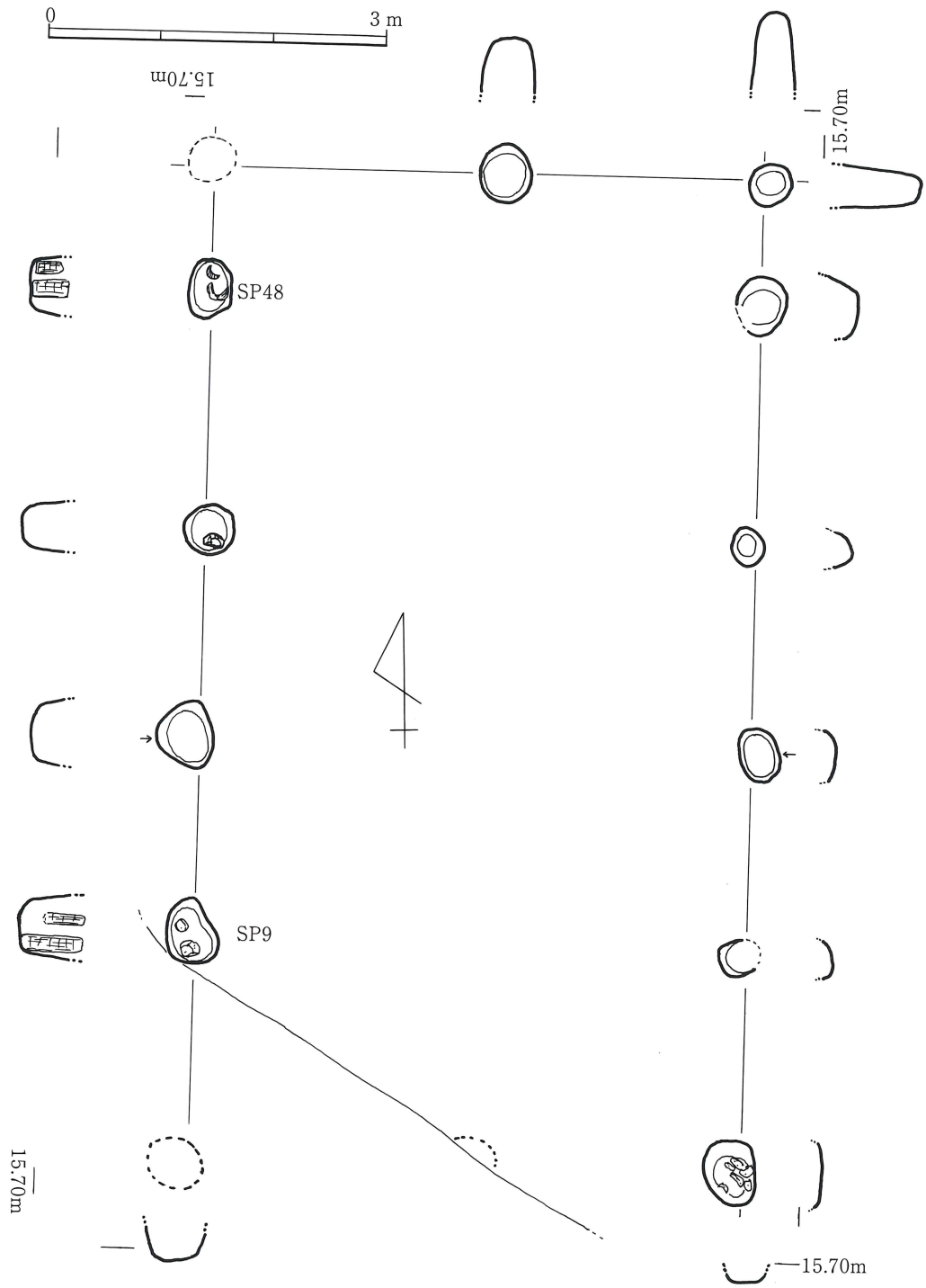
SB3を構成する柱穴群のうち、南西隅部に位置する柱穴である(第7図P3)。直径約45cm、残存深さ70cmの規模を有し、底部から上に約25cmの長さを持つ柱の木質部が出ている。木質部の直径は約8cmである。木質部の横断面は遺跡の谷側方向が空いた三日月形であるが、これは柱の内部の腐食であろうが、三日月形の断面は水の影響を受けやすい山側部分の残りがよかったことに由来するものだろう。

P48

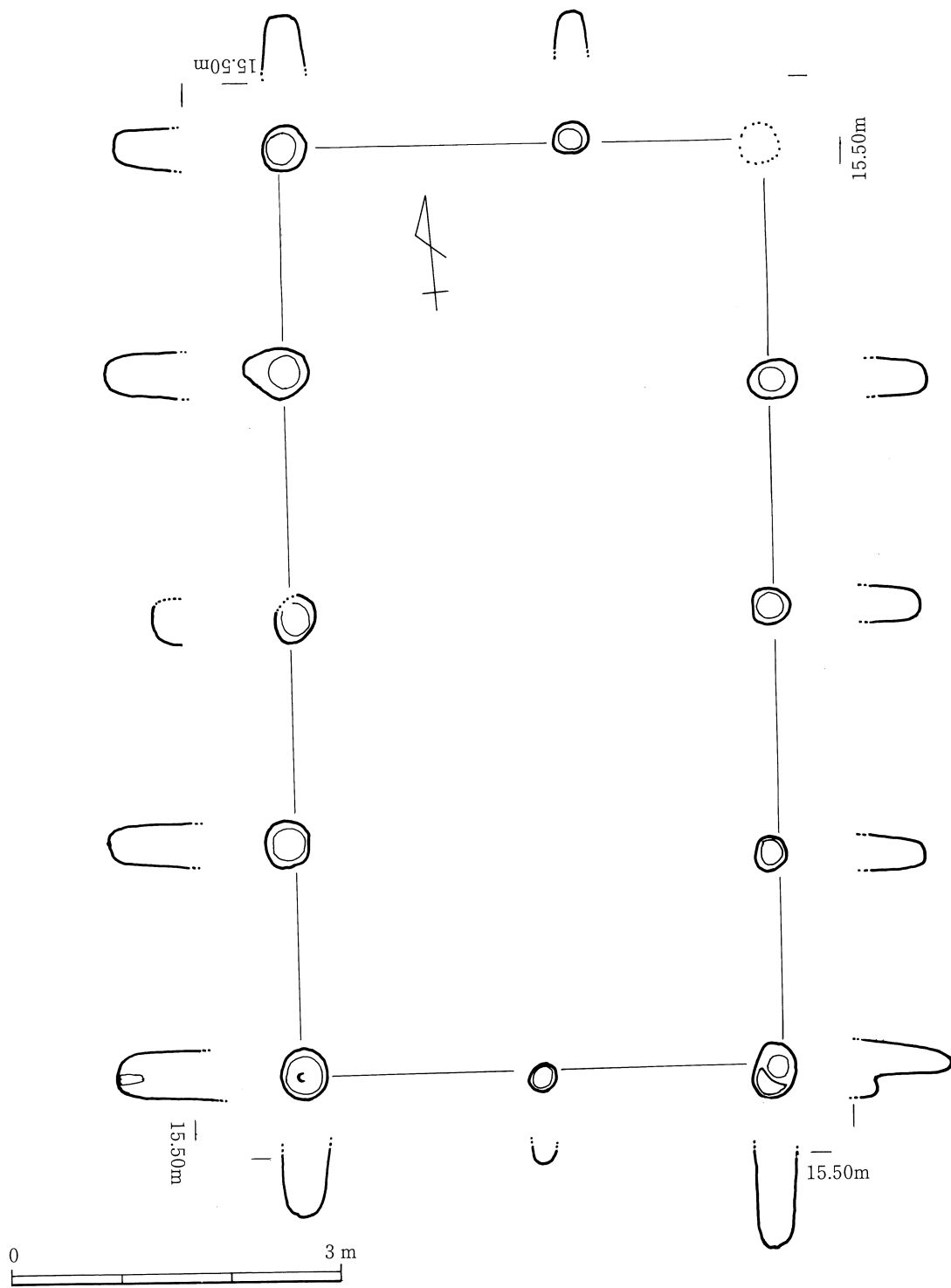
SB2を構成する西側柱穴列のうち、北から2番目に位置する柱穴である(第7図P48)。南北に約43cm、東西38cmの規模を有する長円形の柱穴である。残存深さ30cmの規模を有し、底部から大きい物で上に約32cm、小さい物で上に約25cmの長さを持つ2本の柱痕が出ている。木質部の直径は大きい物が約20cm、小さい物で12cmの規模をもつ。木質部の横断面はやはり遺跡の谷側方向が空いた三日月形であるが、これは柱の内部の腐食であろうが、三日月形の断面は水の影響を受けやすい部分の残りがよかったことに由来するものだろう。



第4図 SB1の平面図



第5図 SB 2の平面図



第6図 SB3の平面図

P21・P22

S B 2 を構成する柱穴群のうち b、西側柱穴列のうち、北から 4 番目に位置する柱穴が P21 で、その北に密接する状況で隣接するのが P22 である(第 7 図 P21・22)。P21 の直径は約 45cm、残存深さ 40cm の規模を有し、底部から上に約 23cm の長さを持つ柱の木質部が出ている。木質部の直径は推定 18cm である。P22 の直径は約 45cm、残存深さ 40cm の規模を有し、底部から上に約 23cm の長さを持つ柱の木質部が出ている。木質部の直径は推定 18cm である。

P15

発掘区南縁部に位置する遺構である(第 3 図)。SH15 は長軸が約 57cm、短軸 45cm の楕円形の遺構である(第 7 図 P15)。残存深さ 30cm の規模を有し、底部から上に約 25cm までの間に 6 個の石を積んでいる。機能は明らかではないが、あるいは柱の固定にかかるものかもしれない。

P39

発掘区北半部に位置する柱穴で、S B 1 の東側柱穴列の南延長上に隣接する柱穴である(第 3 図)。P 39 は長軸約 40cm、短軸 35cm の規模を有する楕円形の柱穴で、底が上下 2 段となっており、浅い部分で深さ 38cm。深い部分で残存深さ 47cm の規模を有している(第 7 図 P 39)。深い部分の底に接して 15 世紀後半代に位置づけられる備前焼の播鉢破片が底直上から出ている。

P 9

S B 2 を構成する西側柱穴列のうち、北から 5 番目に位置する柱穴である(第 7 図 P 9)。南北に約 59cm、東西 45cm の規模を有する達磨形の柱穴である。残存深さ 50cm の規模を有し、底部から大きい物で上に約 60cm、小さい物で埋土の中位から上に約 40cm の長さを持つ 2 本の柱痕が出ている。木質部の直径は南側の大きい物が約 16cm、北側の小さい物で 12cm の規模をもつ。土錘が 1 点出ている。

P40

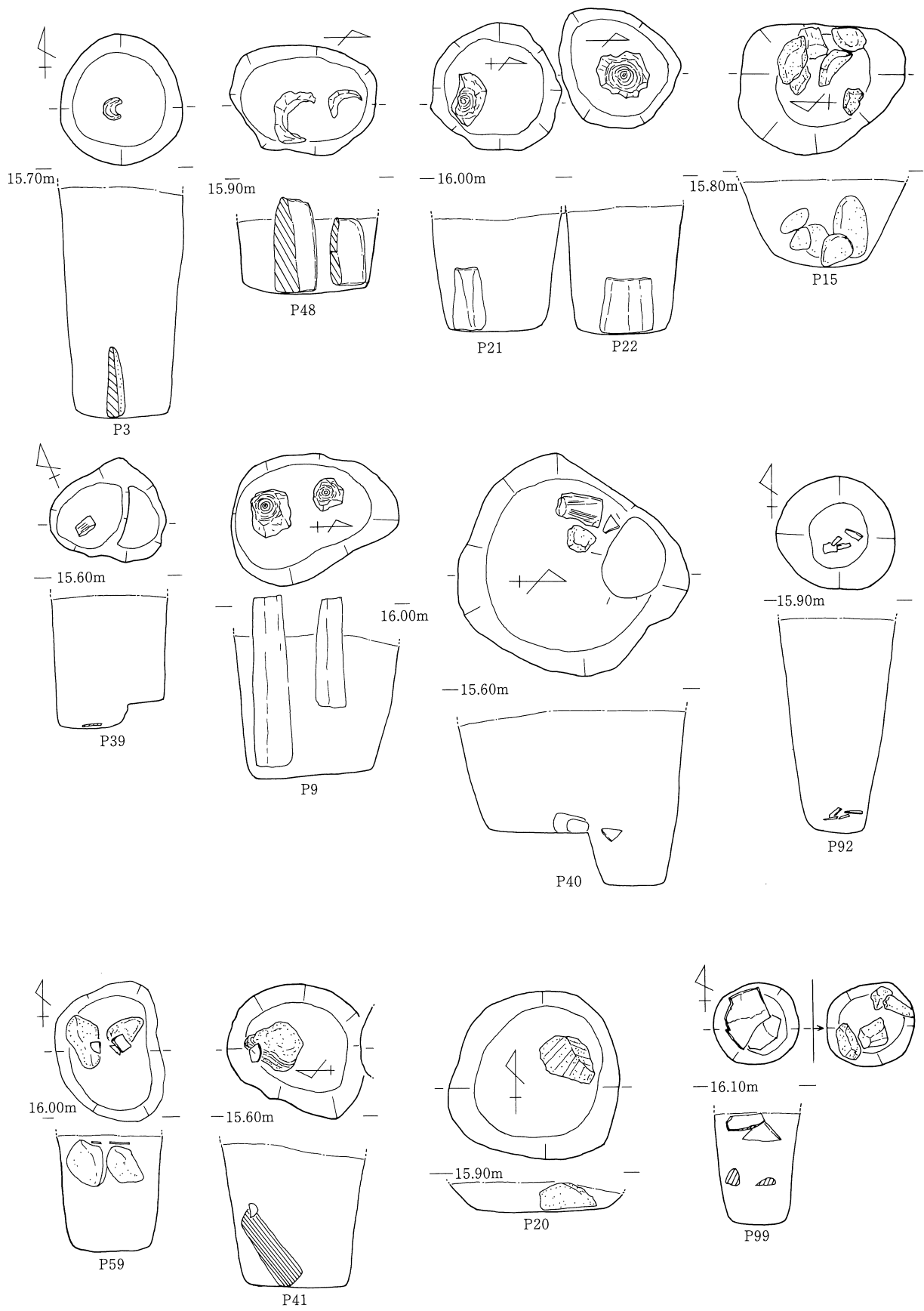
発掘区北半部に位置する土坑及び柱穴で、S B 1 の東側柱穴列の南延長上に隣接する土坑である(第 3 図)。P40 は直径約 80cm の規模を有するほぼ円形の土坑で、底が上下 2 段となっており、浅い部分で深さ 60cm、深い部分で深さ 43cm の規模を有している(第 7 図 P 39)。深い部分の穴は元々柱穴であった可能性も高く、直径は約 30cm である。底に接して 15 世紀後半代に位置づけられる備前焼の播鉢破片と、砥石が出ている。

P92

S B 1 の南側に位置する柱穴である(第 7 図 P92)。直径約 42cm、残存深さ 75cm の規模を有する。底部から上に約 5cm の高さで土師質土器が出ている。土師質土器は器形から豊後 16 - 1 期(16 世紀前半)と考えられる例である(坪根・塩地 2001)。

P59

発掘区北半部の S B 1 の西側に位置する遺構である(第 3 図)。P 59 は南北が約 50cm、東西が 36cm、残存する深さが 41cm の規模を有する楕円形の遺構である(第 7 図 P59)。埋土の上半に大きめの石が 2 個あり、更にこの石の上に土師質土器破片があった。土師質土器の年代は豊後 16 - 2 期(16 世紀後半)と考えられる例である(坪根・塩地 2001)。



0 1 m

第7図 ピット実測図

P41

発掘区北半部のSB1の南東側に位置する遺構である(第3図)。P41は南北が約50cm、東西が43cm、残存する深さが100cmの規模を有する楕円形の遺構である(第7図P41)。遺構の底から北壁に立てかけた板状の大きい石が1個あり、更にこの石の上に青磁の破片があった。

P20

発掘区南半部のSB2の西側柱穴列の北から3番目と4番目の間に位置する土坑である(第3図)。P20は直径が60cmのほぼ円形で、残存する深さが約10cmの規模を有する楕円形の遺構である(第7図P20)。土坑の東よりに大きい角礫が1個あった。

P99

発掘区北半の崖に近いところに位置する柱穴である(第3図)。P99は直径約32cmの規模を有する円形の土坑で、深さ40cmの規模を有している(第7図P99)。底部から上に約13cmの高さで柱固定の石であったとも考えられる石が4個出ている。その上15cm～25cm間に備前焼の甕底部破片が出ている。

SK1

発掘区北半部に位置するSB1内の土坑である(第3図)。SK1は東西の長軸が204cm、南北の幅は65cm(西端)と38cm(東端)の規模を有する長方形の土坑である(第8図SK1)。西端の内側が2段となっており、浅い上段部分で深さ30～35cm、深い部分で深さ43cmの規模を有し、東端内部の深さは42cmである。東端内面には深い部分の穴は元々柱穴であった可能性も高く、直径は約30cmである。東端内面の南側壁に接して環状の鉄製品と寛永通宝が並んで出た。遺物の深さは33cmと40cmである。

SK2

発掘区北半部に位置するSB1内の土坑である(第3図)。SK2は東西の長軸が150cm、南北の幅は50cm(中央)と65cm(東端)の規模を有する長方形の土坑である(第8図SK2)。両端の内側が2段となっている。

SD1

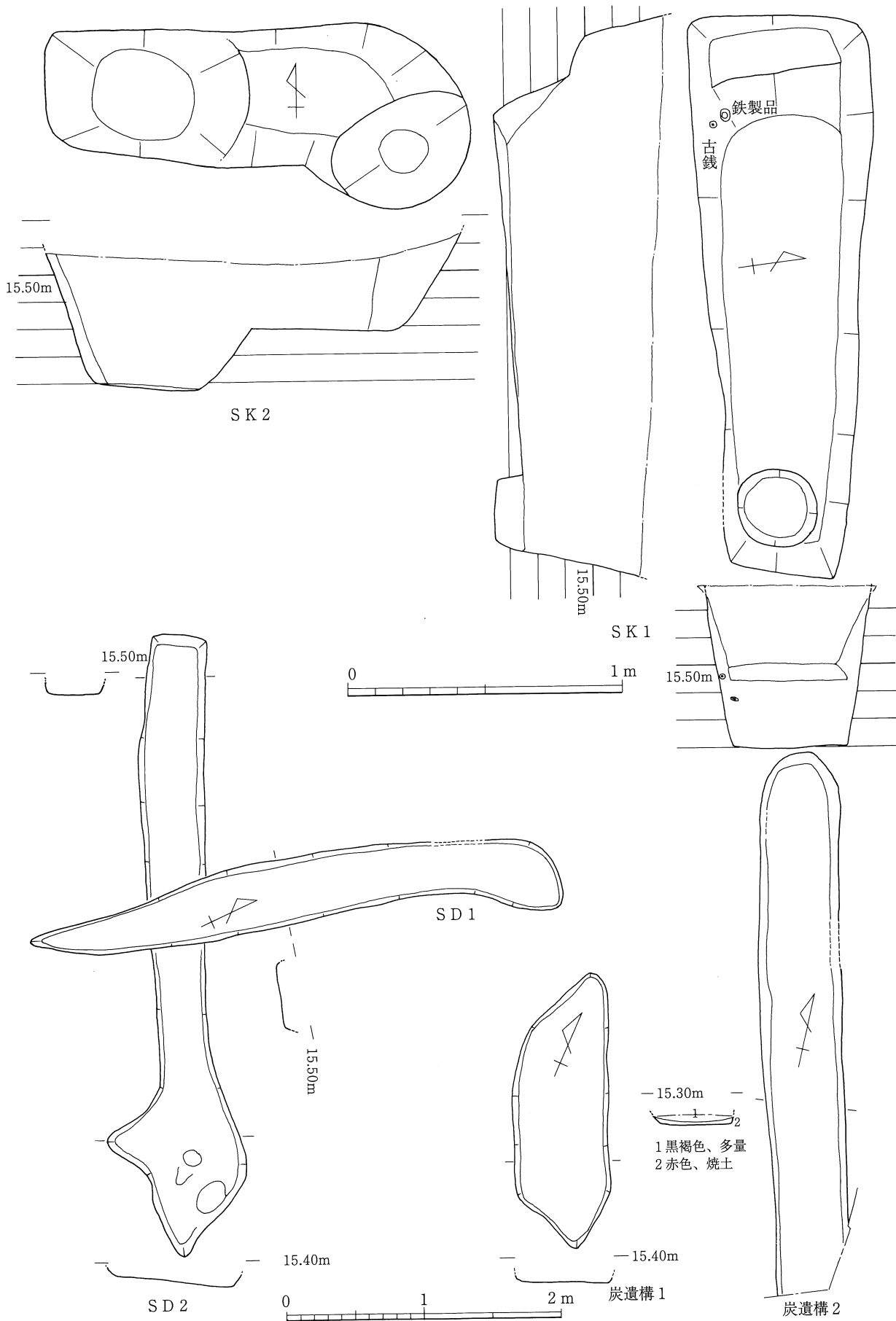
発掘区南半部に位置するSB3内の溝である(第3図)。SD1は南北の長軸が194cm、東西の幅は中央で24cmあり、南へ窄まっていく(第8図SD1)。深さは浅く2～3cmしかない。土の締まりが弱いことから江戸時代の可能性が高い。

SD2

発掘区南半部に位置するSB3内の溝である(第3図)。SD2はSD1に切られる関係にあり、南北の幅が24cm～94cm、東西の長軸は227cmあり、西端付近が幅広となる(第8図SD2)。深さは浅く4～5cmである。西半部の内部土には炭が極めて多く締まりが弱いので江戸時代の可能性が高い。

炭遺構1・炭遺構2

発掘区南半部に位置するSB3の東北溝である(第3図)。炭1と炭2は平行し、内部に多量の炭を持つ浅い溝である(第8図炭1・炭2)。



第8図 土坑・溝遺構実測図

3. 遺物

本遺跡では中世～近世を中心とする遺物がみられたが、概ね中世後期を主体とするものである。遺物は柱穴・土坑を中心に出土した。土坑については数基検出されたが、いずれも遺物は僅少のうえ細片が多く図示しえなかった。ここでは柱穴を中心にみていくことにする。

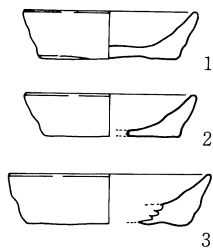
第9図は柱穴のなかでもまとめて出土したもので、僅少なながらも当該地域の土器様相を考えるうえで手掛かりとなるものである。

柱穴1（1～3）では土師質土器小皿が見られる。1は完形品で、口径6.7cm、器高1.9cm、底径5.3cmを測る。いずれの小皿も底部から垂直気味に立ち上がり、口縁部端部はまるみをもつ。体部と底部の境は不明瞭で、底部の器壁は薄い。調整は回転ナデ、底部切り離しは糸切り離しである。色調は明褐色を呈する。

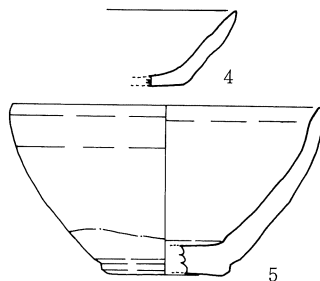
柱穴2（4・5）の4は土師質土器坏で、底部から斜上方気味に立ち上がる。口縁部はすぼまっており、口唇部は尖り気味になる。5は建窯産の天目碗である。高台は低く、内彎気味に立ち上がる。口唇部はすぼまり、内側に段をもつ。素地は明褐色で、外面体部下半から底部にかけて露胎である。柱穴3（6・7）は、土師質土器小皿、坏である。6は底部の器壁が厚い。7は底部から斜上方に開く。いずれも回転ナデ、底部切り離しは糸切り離しである。

柱穴4（8～10）はいずれも土師質土器坏で、順に中層・下層・最下層から出土している。8の見込みにはロク口痕が残っている。9・10は底部から斜上方に開き、口縁部端部はまるみをおびる。体部と底部の境は不明瞭である。

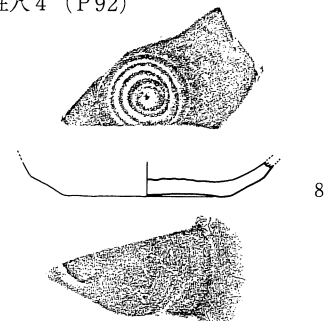
柱穴1（P17）



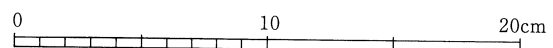
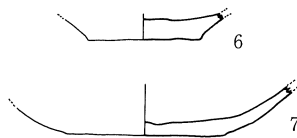
柱穴2（P82）



柱穴4（P92）



柱穴3（P102）



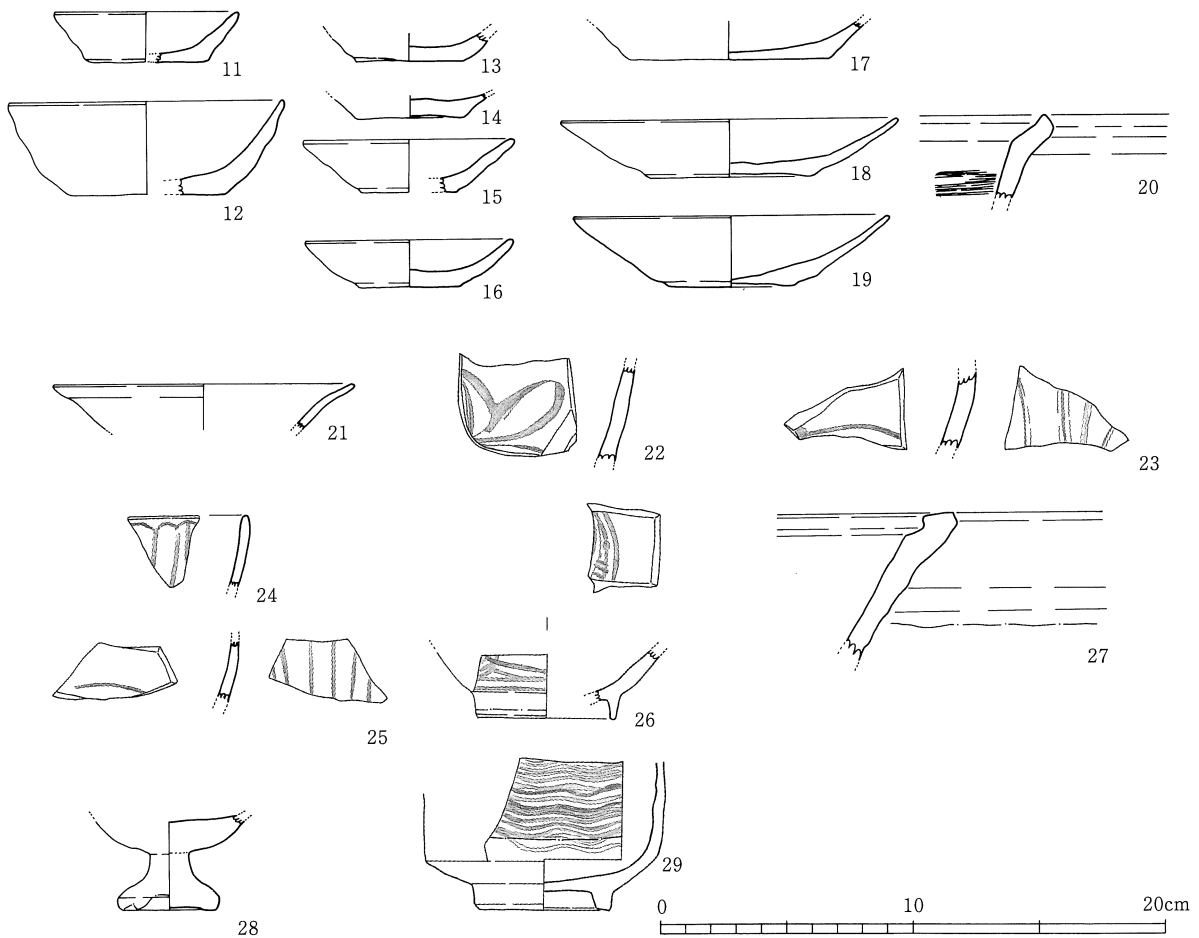
第9図 出土遺物実測図（1／3）

第10・11図は柱穴から個別に出土したもので、器種別に順にみていくことにする。

11～19は土師質土器である。11は小皿で、斜上方に開き口縁部端部はすぼまる。12は坏。11と同様に口縁部端部はすぼまる。13～19は11・12とは器形が異なる。13～16は小皿で、底部の器壁が厚い。

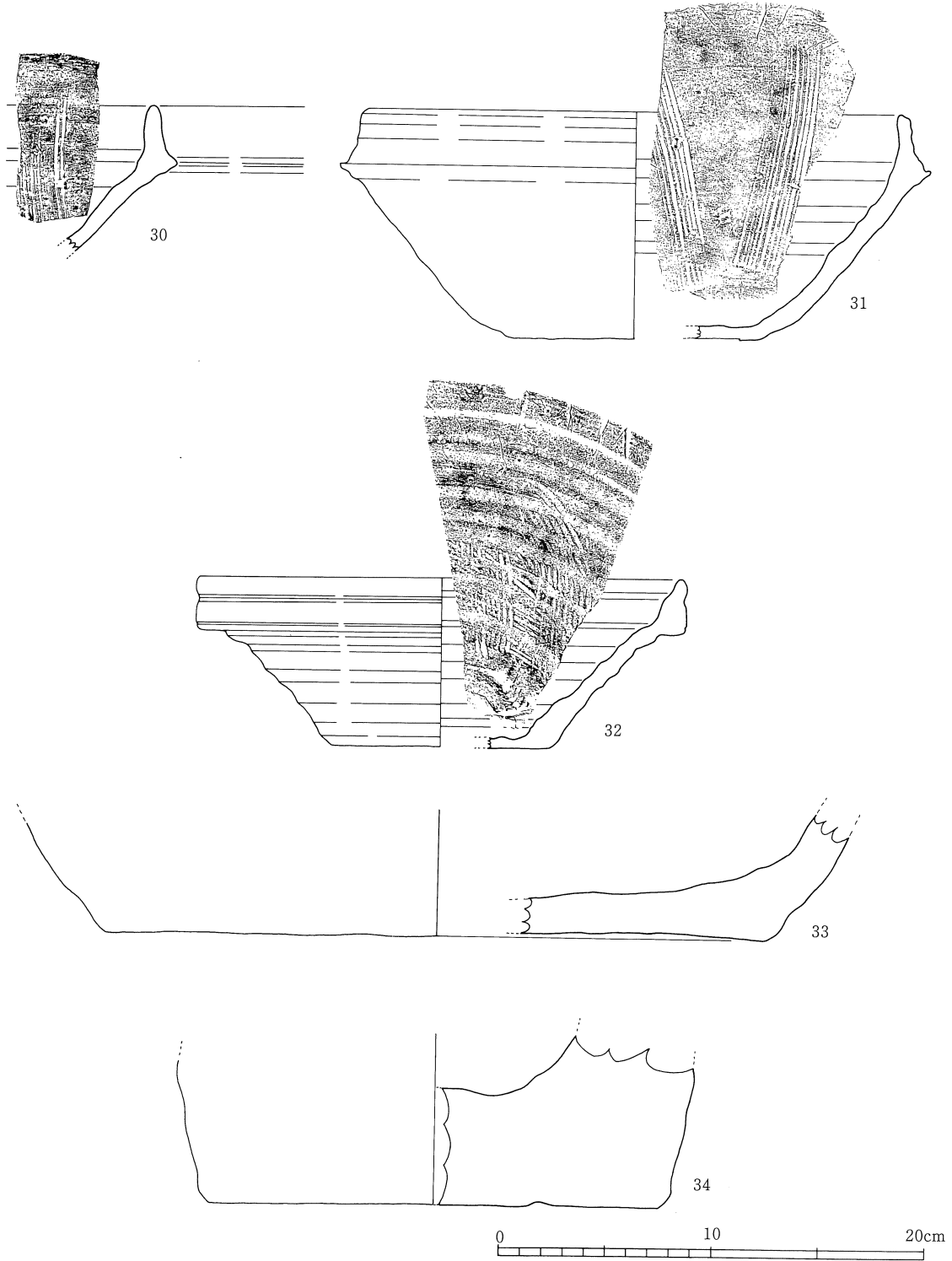
17～19は坏。柱穴4の坏と同様な器形を有し、斜上方に大きく開く。体部と底部の境は不明瞭である。なお11～19の土師質土器の調整はいずれも回転ナデで、底部切り離しは糸切り離しである。20は土師質土器土鍋で、口縁部はくの字状に外反し、口唇部を上方に摘み上げている。体部に横方向のハケメが施される。この土鍋は口縁部の形状から14世紀代と考えられる。

21～26は輸入陶磁器で、いずれも中国産である。21は白磁皿で、口縁部下ほどから折れ気味に外反する。16世紀代。22～25は龍泉窯系青磁碗である。22は外面が無文で、内面にヘラ状工具で花文を施す。13世紀代。23は外面に片切りで蓮弁を施し、内面は界線状が認められる。釉が厚めにかかる。13世紀代。24・25は線描きの細かい蓮弁を施したものである。24は連続山形文の下に細線を施す。25の内面に細線状が認められる。15世紀後半～16世紀前半代。26は青花碗で、蓮子碗タイプのものである。高台が高く、豊付けは釉が掻き取られており砂目が付着する。外面は輪郭を細線で描かず一筆描きで唐草文を描く。内面は界線状が認められる。16世紀前半代。

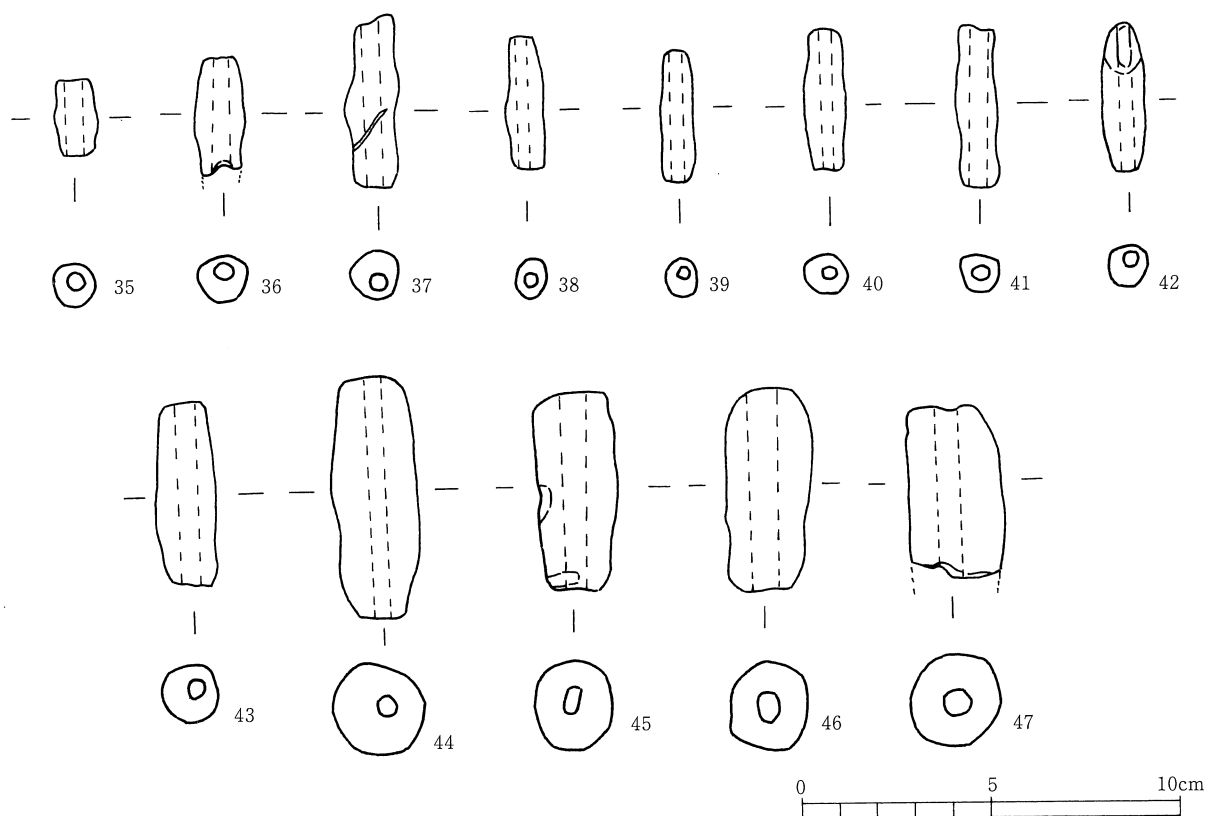


第10図 出土遺物実測図 (1/3)

27は瀬戸・美濃焼の皿と考えられる。体部から直線的に伸び、口縁部下ほどから垂直気味に立ち上がる。内面に段を有する。外面体部中位から下は露胎である。28は肥前系陶磁器の染付仏飯器で焼成不良である。高台内の削り込みは浅い。坏部はまるみを帯びる。18世紀後半代。29は唐津系陶器碗である。断面方形の高台を有し、体部下半で屈曲して垂直に伸びる。外面体部は刷毛目装飾を施し、体部下半の一部は白泥のままである。18世紀代。



第11図 出土遺物実測図 (1/3)

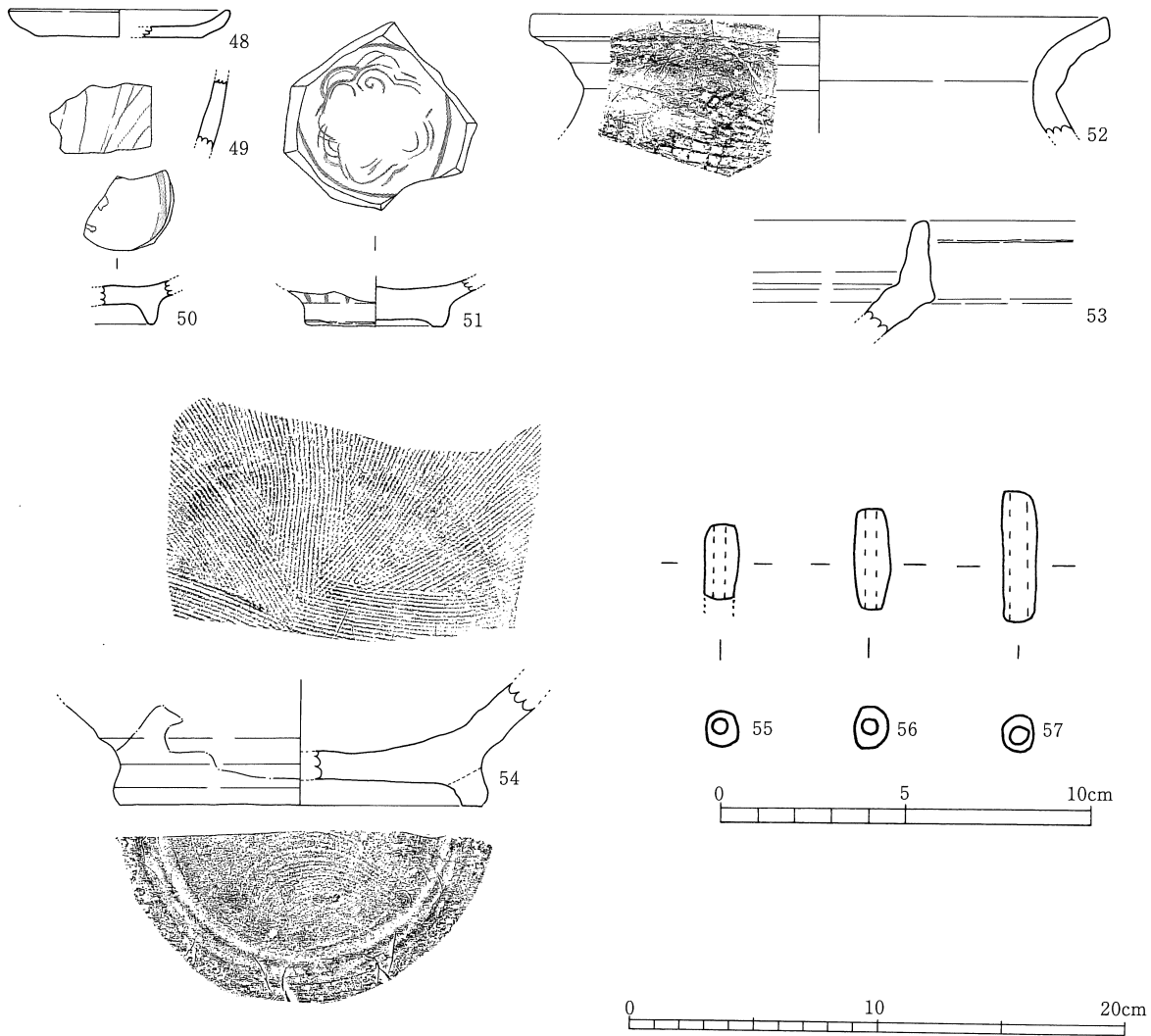


第12図 出土遺物実測図 (1/2)

30~33は備前焼で、30~32は播鉢、33は甕である。30は口縁部がやや直立気味に立ち上がり、拡張される。端部はまるくおさまる。内面には7条を基調とする摺目が認められる。31は口縁部が内傾気味に立ち上がり、わずかに拡張される。端部はまるくおさまる。内面には10条単位を基調とする摺目が認められる。なお外面底部の一部に剥離が認められる。32は口縁部が厚くやや外傾気味で、頸部の張り出しが強い。口縁部外面に2条の凹線が認められる。内面には8~9条の摺目と、斜め方向に施す摺目が交差している。33は底部が上げ底気味である。内面体部下半の一部に木目状の当て具痕が認められる。内面底部にはヘラケズリ、外面底部は工具状の不定方向ナデである。復元底径31.2cmを測る。播鉢の時期については近年の研究から、30・31は15世紀後半代、32は16世紀末~17世紀前半と考えられる。

34は石製品であるが、上部が欠損している。茶臼等が想定されたが、器形や法量から器種は不明である。内面に凹みが認められる。復元底径21.2cm、底部の厚み5.5cmを測る。石材は阿蘇溶結凝灰岩である。

35~47は土錘である。すべて土師質で管状である。大きさは最大長さ6.2cm、最小長2.0cmを測る。最大重量35.2g、最少重量2.8gを測る。長さについては、2.0cm(35)、3.5~4.6cm(36~42)、4.8cm(43)と、5.3~6.4cm(44~47)に分けることができる。44~47は大型品である。なお、35・44・45は同一の柱穴から出土している。



第13図 出土遺物実測図 (1/3) (土錘は1/2)

第13図は、表土剥ぎ及び遺構検出の際出土した遺物である。

48は土師質土器小皿である。内彎気味に開き、口縁部端部はまるくおさまる。体部と底部の境は不明瞭である。回転ナデ、底部切り離しは糸切り離しである。柱穴から出土した土師質土器よりも古相を呈するものと考えられる。

49～51は龍泉窯系青磁碗である。49は片切りにより蓮弁を施す。13世紀代。50は比較的高い高台である。見込みに界線を施し、その内側に花文様のスタンプが施される。内外面ともに貫入が著しい。釉調は淡オリーブ色である。51は外面に鎚蓮弁を施している。高台は低く、底部の器壁は厚い。見込みには界線を施し、その内側は花文状の文様を施す。畳付け及び底部は露胎である。13世紀代。52は亀山焼系の甕である。体部から緩やかに外反する。口縁部端部は面取りを行なう。外面体部から頸部にかけて格子目叩きを行なう。体部内面は工具状のナデ。

53は備前焼の播鉢である。口縁部は直立しており、端部はやや拡張が認められる。口縁部外面に沈線が認められる。15世紀後半代。54は唐津系陶器播鉢である。高台は外方へと張り出す。内面は放射状に摺目が施される。外面底部に糸切りの痕跡が認められる。

55～57は土錘で、管状を呈する。すべて土師質である。

第1表 遺物観察表1

遺物番号	出土位置	種類	器種	口径	器高	底径	調整	胎土	色調	備考
1	P17	土師質土器	小皿	6.7	1.9	5.3	内外面回転ナデ	砂粒	明褐色	柱穴1、完形品
2	P17	土師質土器	小皿	(6.6)	1.7	(5.3)	内外面回転ナデ	砂粒	明褐色	柱穴1
3	P17	土師質土器	小皿	(7.9)	2.0	(6.3)	内外面回転ナデ	砂粒	明褐色	柱穴1
4	P82	土師質土器	坏				内外面回転ナデ	赤色粒、砂粒	暗赤褐色	柱穴2
5	P82	天目	碗	(12.2)	7.7	(4.4)			暗黒褐色	柱穴2、建窯
6	P102	土師質土器	小皿			4.4	内外面回転ナデ	赤色粒	暗赤褐色	柱穴3
7	P102	土師質土器	坏			6.2	内外面回転ナデ	赤色粒	淡赤褐色	柱穴3
8	P92	土師質土器	坏			6.6	回転ナデ、見込み口口痕	赤色粒	淡橙褐色	柱穴4、中層
9	P92	土師質土器	坏	(11.2)	3.2	(5.1)	内外面回転ナデ	砂粒	淡赤褐色	柱穴4、下層
10	P92	土師質土器	坏	(12.8)	3.1	(6.6)	内外面回転ナデ	赤色粒	淡赤褐色	柱穴4、最下層
11	P11	土師質土器	小皿	(7.2)	2.0	(4.4)	内外面回転ナデ	赤色粒	淡赤褐色	
12	P85	土師質土器	坏	(10.8)	3.7	(6.2)	内外面回転ナデ	赤色粒、砂粒	明褐色	
13	P83	土師質土器	小皿			4.2	内外面回転ナデ	赤色粒、砂粒	明褐色	
14	P58	土師質土器	小皿			(4.2)	内外面回転ナデ	赤色粒	暗褐色	
15	P44	土師質土器	小皿	(8.2)	2.1	(3.8)	内外面回転ナデ	赤色粒	暗赤褐色	
16	P52	土師質土器	小皿	(8.2)	1.9	3.9	内外面回転ナデ	赤色粒	明褐色	
17	P98	土師質土器	坏			(7.8)	内外面回転ナデ	赤色粒	暗褐色	
18	P95	土師質土器	坏	(13.2)	2.3	6.4	内外面回転ナデ	赤色粒	暗橙褐色	
19	P59	土師質土器	坏	(12.4)	2.8	(5.1)	内外面回転ナデ	赤色粒	淡赤褐色	
20	P91	土師質土器	土鍋				ナデ、内面ハケメ	砂粒	暗褐色	
21	P89	白磁	皿	(11.8)					白灰色	
22	P105	青磁	碗				内面花文		暗オリーブ色	龍泉窯系
23	P65	青磁	碗				外面蓮弁		淡オリーブ色	龍泉窯系
24	P81	青磁	碗				外面線描き蓮弁		淡オリーブ色	龍泉窯系
25	P46	青磁	碗				外面線描き蓮弁		淡オリーブ色	龍泉窯系
26	P104	青花	碗			(5.4)	外面唐草文		淡褐色	蓮子碗
27	P94	陶器	皿				内外面ナデ		淡緑黄色	瀬戸・美濃系
28	P36	磁器	仏飯器			(3.8)	内外面回転ナデ		白灰色	肥前系
29	P88	陶器	碗			5.1	回転ナデ、外面刷毛目装飾		淡茶褐色	唐津系
30	P39	陶器	播鉢				回転ナデ、摺目7条単位		青灰色	備前焼
31	P40	陶器	播鉢	(25.2)	10.6	(11.6)	回転ナデ、摺目10条単位		暗赤褐色	備前焼
32	P107	陶器	播鉢	(22.8)	7.9	(10.2)	回転ナデ、交差摺目		暗赤褐色	備前焼
33	P99	陶器	甕			(31.2)	ナデ、底部不定方向ナデ		暗赤褐色	備前焼

第2表 遺物観察表2

遺物番号	出土位置	種類	器種	口径	器高	底径	調整	胎土	調整	備考
34	P76	石製容器		(21.6)			工具による調整		灰褐色	凝灰岩
35	P34	土製品	土錘	長さ2.0、最大径1.1、重さ2.8g			ナデ	石英・角閃	暗褐色	
36	P17	土製品	土錘	長さ3.1、最大径1.3、重さ5.6g			ナデ	石英・角閃	暗黒褐色	
37	P17	土製品	土錘	長さ4.6、最大径1.3、重さ6.9g			ナデ	砂粒	暗褐色	
38	P23	土製品	土錘	長さ3.6、最大径1.0、重さ3.9g			ナデ	赤色粒	明褐色	
39	P111	土製品	土錘	長さ3.5、最大径0.8、重さ2.7g			ナデ	赤色粒	淡茶褐色	
40	P78	土製品	土錘	長さ3.7、最大径1.1、重さ4.9g			ナデ	砂粒	暗灰褐色	
41	P13	土製品	土錘	長さ4.3、最大径1.1、重さ5.7g			ナデ	赤色粒	淡灰褐色	
42	P55	土製品	土錘	長さ3.9、最大径1.2、重さ4.0g			ナデ	赤色粒	淡赤褐色	
43	P9	土製品	土錘	長さ4.8、最大径1.6、重さ12.9g			ナデ	砂粒	明褐色	
44	P34	土製品	土錘	長さ6.4、最大径2.3、重さ35.2g			ナデ	赤色粒	明褐色	
45	P34	土製品	土錘	長さ5.3、最大径2.1、重さ25.8g			ナデ	赤色粒	赤褐色	
46	P8	土製品	土錘	長さ5.3、最大径2.2、重さ26.1g			ナデ	赤色粒	暗灰褐色	
47	P10	土製品	土錘	長さ4.5、最大径2.5、重さ28.9g			ナデ	赤色粒	暗赤褐色	
48	表探	土師質土器	小皿	(8.8)	1.1	(6.8)	内外面回転ナデ	赤色粒	淡橙褐色	
49	表探	青磁	碗				外面蓮弁		暗オリーブ色	龍泉窯系
50	表探	青磁	碗				見込み花文 スタンプ		淡オリーブ色	龍泉窯系
51	表探	青磁	碗			5.5	見込み花文		淡オリーブ色	龍泉窯系
52	表探	須恵質土器	甕	(23.2)			ナデ、外面格子 目叩き	砂粒	暗灰褐色	亀山焼系
53	表探	陶器	擂鉢				回転ナデ		橙褐色	備前焼
54	表探	陶器	擂鉢			(14.8)	回転ナデ、底部 糸切り離し		暗橙褐色	唐津系
55	表探	土師質土器	土錘	長さ2.0、最大径1.1、重さ2.8g			ナデ	赤色粒	淡赤褐色	
56	表探	土師質土器	土錘	長さ2.7、最大径0.9、重さ2.5g			ナデ	赤色粒	暗赤褐色	
57	表探	土師質土器	土錘	長さ3.6、最大径1.0、重さ3.3g			ナデ	砂粒	暗赤褐色	

なおP80から鍛冶に関連する鉄滓が見ついている。

第4章 まとめ

1. 遺物

角木地区の遺跡では、柱穴・土坑・溝状遺構等が検出され、掘立柱建物の並びが確認できたが、この遺構がどのような性格をもつものかは明らかにしえない。しかし角木地区の遺跡では多数の柱穴から、先述のとおり中世後期を主体とする遺物が出土している。ここではこれまで発掘調査が行なわれた榎牟礼城跡及び周辺遺跡の成果をふまえて時期的様相について考え(原田1994)、まとめとしたい。

まず陶磁器だが、線描きの蓮弁を配する龍泉窯系青磁碗(24・25)は、上田秀夫氏のB-VI類(上田1982)、白磁皿(21)は森田勉氏のE群(森田1982)、青花碗(26)は小野正敏氏の染付碗C群(小野1982)に相当する。備前焼の播鉢は(30・31)は乗岡実氏の中世5期(乗岡2001)に相当する。以上のことから概ね15世紀後半～16世紀前半の年代が考えられる。

土師質土器坏・小皿は、その形態から大きく2つの形態に分けることができる。ひとつは器壁が厚く、柱穴1や柱穴2のような、現在「箱型」と称される一群である(1類とする)。もうひとつは体部が大きく開き、器壁が薄い一群で柱穴4等が挙げられる(2類とする)。1類、2類ともロクロ痕を有さず、ともにその胎土は概ね赤色粒が認められる。なお京都系土師器の出土は認められない。出土量や、良好な一括資料が少ないことは否めないところであるが、本遺跡では2類がその大半を占めるようである。

榎牟礼城跡及び周辺遺跡の調査のなかで長畑地区・古市地区は土器様相を考えるうえで手掛かりとなるもので、長畑地区は角木遺跡に近接する。長畑地区では両者の形態がみられるが、そのうち2類が最も占めている。また京都系土師器の出土が認められるが、2類との供件事例は確認されていない。古市地区では1類のみが出土している。

角木地区の遺跡で出土した1類の土器は、当該地域において良好な資料が少ないため、ここでは15世紀代としておく。なお柱穴2の坏は15世紀中～後半頃のものであろうか。2類については、近年、当該時期における大分県の在地土器について、後藤一重氏がその様相について論じている(後藤2000)。氏は16世紀においてロクロ痕を有しない地域として、本遺跡が位置する海部地域・国東地域を挙げている。一方ロクロ痕を残す地域は、中世大友府内町遺跡及び周辺地域、県南部で確認されており、複雑な様相を呈する。いずれの地域においても京都系土師器は出土している。京都系土師器の分布は、大友氏を中核としそれを支える南郡衆及び同紋衆が領していることから政治的背景を窺うことができる。このことから在地土器の相違は地域性、工人差によるものと考えられる。本遺跡で出土した2類は良好な資料が僅少なことから、15世紀後半～16世紀代と考えておきたい。今後の資料増加をまちたい。

角木地区の遺跡は以上のことから15世紀後半～16世紀代を中心とするものと考えられる。これまでの周辺地域の調査から榎牟礼城東麓の微高地を中心に、この時期の遺跡が確認されることから角木地区もその広がりとして考えることができる。この時期は榎牟礼城の築城など佐伯氏が勢力を伸ばす時期でもあり、2類の出土や一定量の陶磁器の出土は佐伯氏との関連性を想定することができよう。

(山本)

2. 遺構

遺構の年代は上述の遺物の検討から掘立柱建物が15世紀後半から16世紀代に属するものと考えてよいようだ。その他の柱穴も掘立柱建物を復元できなかったが、概ね同様な時期と考えられる。この他の時期に属するものとしてSK1が17世紀以降の年代が推定されるにすぎない。

冒頭で記したように榎牟礼山の東麓には1990年代の調査で多くの中世遺構の存在が判っている。とりわけ引地ノ下地区や掃木地区においては、大規模な造成工事を行って、山斜面を階段状に平地を削りだした地形があり、この平地を整地後に住居面としていることは、角木地区遺跡の平地が同様な方法で形成されていることと共通す

る。角木地区遺跡における平坦部の面積が約1,200㎡に上ることは、当時の造成工事としては大掛かりなものである。またの角木地区遺跡の時代が15世紀後半から16世紀代の遺物が採取されていることから、引地ノ下地区や掃木地区の時代とも遺跡が形成された時代に概ね一致する。

引地ノ下地区や掃木地区付近は梅牟礼城の根小屋集落とも考えられているが、立地、時代、造成工事という各面で同様な角木地区遺跡も梅牟礼城関連遺跡の可能性が極めて高いといえよう。

(綿貫)

参考文献

- ・ 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁器研究』第2号
- ・ 小野正敏 1982 「15～16世紀の染付碗、皿の分類と編年」『貿易陶磁器研究』第2号
- ・ 後藤一重 2000 「小路遺跡出土土器の分析と遺跡の性格」『小路遺跡 上屋敷遺跡』久住町教育委員会
- ・ 坪根伸也・塩地潤一 2001「豊後国の土器編年」『大分・大友土器研究会論集』121-153
- ・ 乗岡実 2000 「備前焼播鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』
- ・ 原田昭一編 1994 『梅牟礼城跡関連遺跡発掘調査報告書』佐伯市教育委員会
- ・ 森田勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁器研究』第2号

報告書抄録

フリガナ	トガムレジョウアウト	ツノキチュウセイシュウラクアウト
書名	梅牟礼城跡	一角木中世集落跡一
副書名		
巻次		
シリーズ名	大分県文化財調査報告書	
シリーズ番号	第167輯	
編著者	綿貫俊一、山本哲也	
編集機関	大分県教育委員会	
所在地	〒874-0021 大分県大分市府内町3-10-1	
発行年月日	2004年3月31日	

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
トガムレジョウアウト 梅牟礼城跡 ツノキチク 角木地区	オオイタケンサイキシ 大分県佐伯市 オオアザカミオカアザ 大字上岡字 ツノキ 角木 2336-2338	430	002 (地区新 発見)	32° 57' 20"	131° 51' 86"	2003・8・18 ～ 2003・9・24	1,200m	県道工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
梅牟礼城跡 角木地区	集落	室町時代 ～ 安土・桃山 時代	堀立柱建物 土坑	土師器質小皿 備前 焼土錘	梅牟礼山東斜面を 階段状に削りだした 平地に遺構がある。



1 角木地区遺跡の近景と調査風景（上が南）



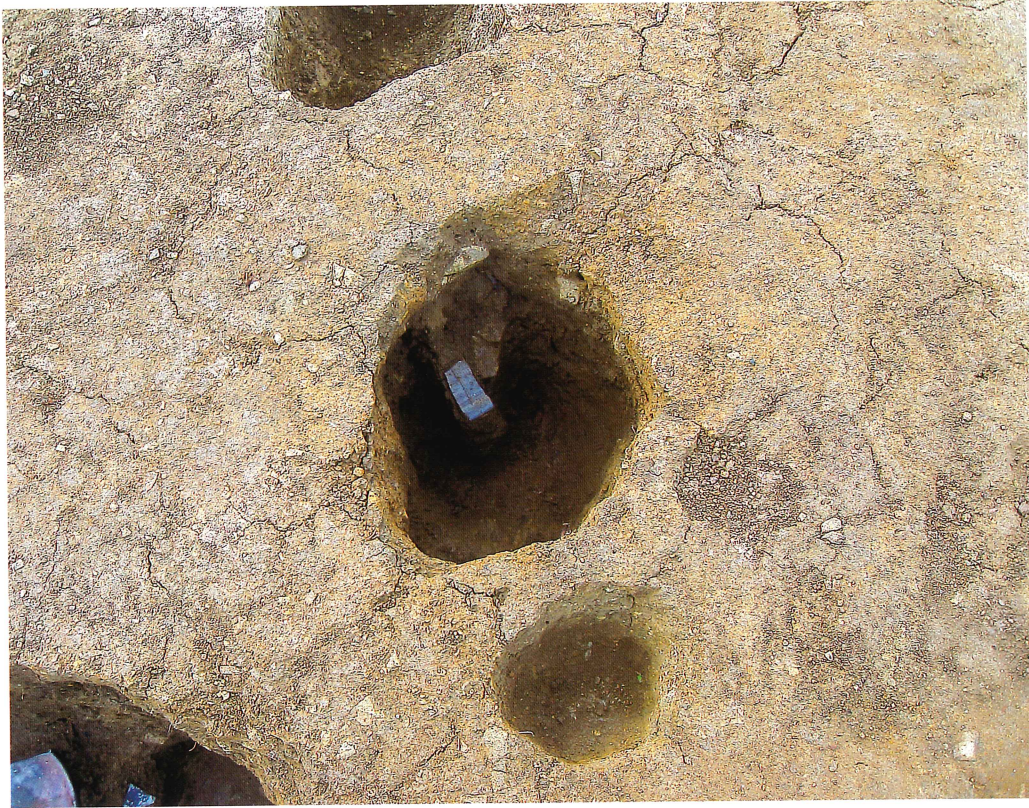
2 SB2 列の柱遺存体
（上が南）



3 P40の遺物出土状態（上が北 右上隅はP39）



4 P41の遺物出土状態（上が北）



5 P 39の遺物出土状態（上が西、左下はP 40）



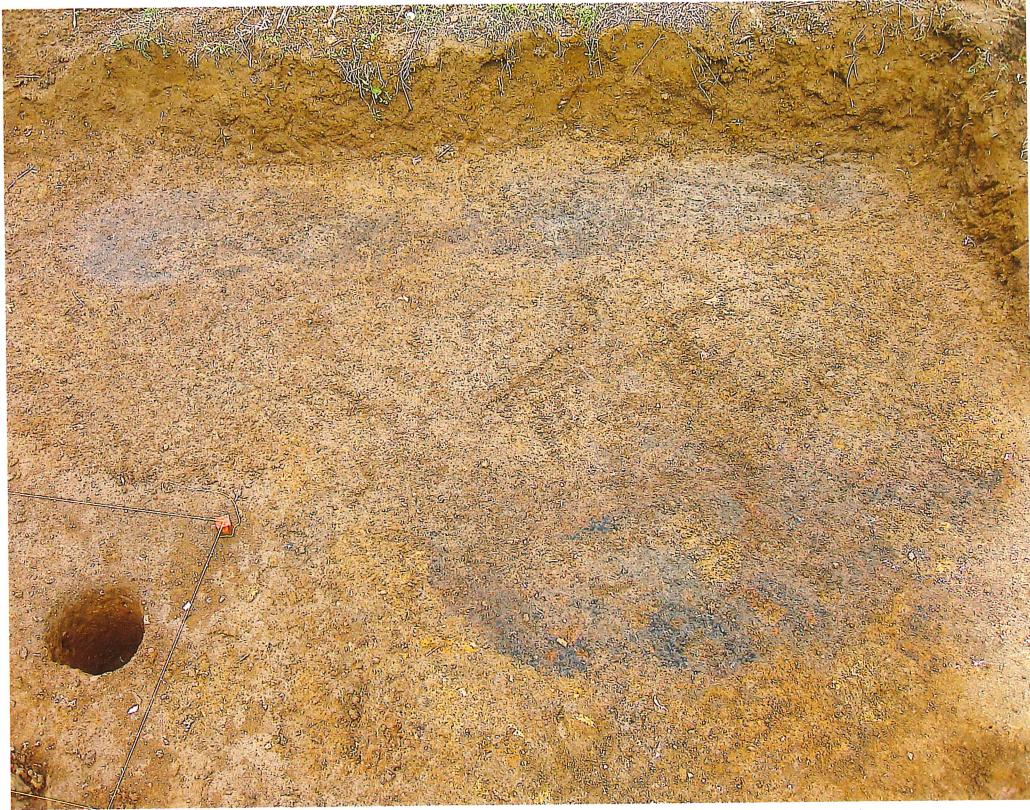
6 P 95の遺物出土状態（上が北、S B 1の西側）



7 SK1の遺物出土状態（上が西）



8 SK1の中央横断面（上が東、右に古銭と環状鉄製品が見える）



9 炭遺構1（手前）、炭遺構2（向こう）の出土状態（上が東）



10 角木地区遺跡の発掘調査員（2003年9月22日15時48分）



11 古備前焼の播鉢内面



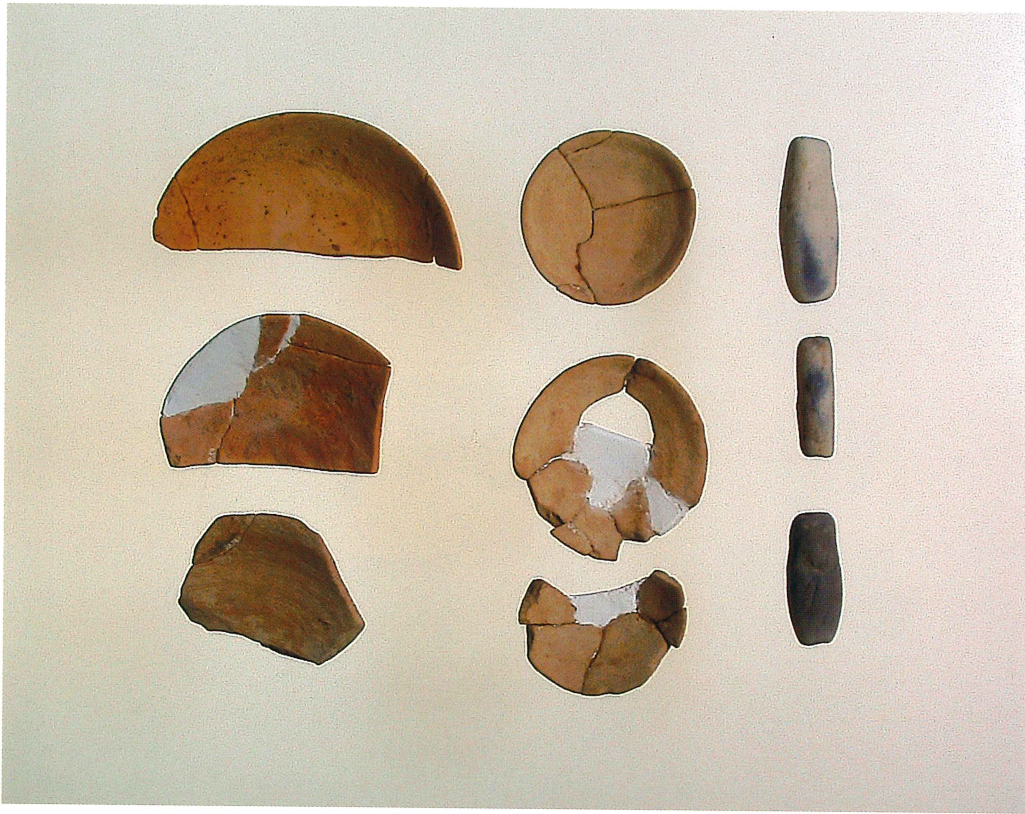
12 古備前焼の播鉢外面



13 陶磁器破片の内面



14 陶磁器破片の外表面



15 土師質土器の皿と小皿、土錘（表）



16 土師質土器の皿と小皿、土錘（裏）

梅 牟 礼 遺 跡
— 角木中世集落跡 —

大分県文化財調査報告書 第167輯

編 集 大分県教育委員会文化課（文化財資料室）
〒870-1113
大分市大字中判田字ビワノ門1977番地
TEL（097）597-5675

発 行 大分県教育委員会
〒870-0021
大分市府内町3丁目10番1号
TEL（097）536-1111

印 刷 株式会社 得丸デザイン印刷
